

# 作品解説 映画と図書館・図書館の椅子

## 【鶴舞図書館だよりについて】

戦災により焼失した鶴舞中央図書館は昭和27年（1952）に再建されました。その2年半後、

昭和30年（1955）より発行されていたのが「鶴舞図書館だより」です。図書館の利用者推移や新しく図書館に入った本などを紹介していた他、職員のエッセイなども掲載されていました。

昭和36年（1961）に発行を終了しましたが、かつての図書館の雰囲気を生き生きと伝えています。

なお現在は鶴舞中央図書館を紹介する「めがね」という冊子が毎年秋に発行されています。

テキストは、『鶴舞図書館だより 13号（昭和31年5月号）』をもとにして加工しました。

## 『映画と図書館』

鶴舞図書館だより（1956年）より

えいがねつ

現代の映画熱は全くすごい。最近の統計によれば名古屋市民は1人あたり年に

みて

14回、映画を観ているということだ。

ぢよじ

されば図書館もこのマスコミの寵児の

のが さる

影響力から脱れ去ることは不可能で、貸し出す本の上でも映画の力はマザマザと現れてきている。

ほとんど読まれていなかつた本が、映画化されるやたちまち出納台の花形に変わる。

ところで図書館の映画への影響力はどうかというと、こいつはさっぱりである。

しょうちくえいが

る。松竹映画「女の足あと」に図書館員が登場してくるが、この映画を見た職員の一人は、映画の中の図書館員がすごく豪華な家に住んでいるので驚いたと感想を述べていた。どうも日本映画の世界では司書にすばらしい高給をくれる図書館が存在するらしい。だいたい図書館はあまり映画には出てこないようで、たまにスクリーンに写ればほんのワンカット、図書館はまだまだ大部屋の俳優である。

## 『図書館の椅子』

鶴舞図書館だより（1956年）より

学生時代にはよく図書館を利用したものです、と仰る人々が、一旦、実社会へ出てしまって、日一日と図書館との縁も薄くなつてしまつ。案外読書好きの人でも、わざわざ図書館へ出かけてまで本を借りるのは、日常生活があまりに煩雜で忙しく、つい面倒、というわけで図書館の門をくぐるのは、何か特別の用か調べ物がある時だけ。そんな人が多いようである。つい先日のことだが、40歳前後の婦人が「使いの途中30分ばかり時間に余裕がありますので、最近入

おっしゃる

いったん

ひいちにち

はんざつ

つたことはないんだけど、ちょっと寄つてみました・・」そんな事を口にされ、手軽な雑誌を手に取つて30分が2、3時間となつた。

よほどお気に召されたらしく、以来時々立ち寄つていかかる。

おんし

蛍の光を口ずさみ恩師と分かれた日の印象のように、図書館を懐かしい思い出の一つとして残しておくのも悪くはないけれども、学習の目的で座つた椅子とはまた別な楽しさが生まれ、心の新しき糧かてともなるのではないだろうか、とこの夫人を眺めてみた。